

監修 佐藤哲英

融通念佛宗教学研究編

## 「良忍上人の研究」

山崎 欣 弥

聖応大師良忍上人(〇七三一—一三三〇)は、日本浄土教史の上からは融通念佛宗の開祖として、日本天台史の上からは大原魚山の声明の大成者としてよく知られ、かつ叡山円頓戒相承の戒脈においても欠かせない人物である。しかしながら、良忍上人についての研究は頗る遅れていて、その実像についても必ずしも明らかにされてはいない。それは良忍を知る上で直接的な資料が少ないことに主な原因があるのであり、良忍には書写本・手抄本の類はあっても著作がないというのが、これまでの定説であった。しかし近年、叡山文庫から良忍作と付記される『布薩略作法』、曼殊院から平安後期の『出家作法』が発見され、良忍の戒律観を知る上で貴重な資料となった。又勝林院の『引声阿弥陀経』は、阿弥陀経に良忍の墨譜が付いており、声明研究に資する所が大きい。この新出の資料の紹介及び研究とさらに修学者の良忍研究の成果をまとめ、良忍上人八百五十回大御遠忌を記念して刊行されたのが、本論文集『良忍上人の研究』

である。

本書は研究編と資料編に分けられ、研究編には十一の論文が載せられている。その題目と執筆者名は次のとおりである。

「良忍上人と融通神道」 田代尚光

「叡山浄土教における良忍上人の地位」 佐藤哲英

「大原如来蔵における良忍上人関係資料」 横田兼章

「良忍上人伝の研究」 佐藤哲英・横田兼章

「良忍上人作『略布薩次第』の研究」 小寺文顕

「良忍上人と曼殊院本『出家作法』」 白土わか

「良忍上人と魚山声明」 天納伝中

「円覚十万人道御伝」 藤井元了

「佛教思想と融通念佛」 泰本 融

「融通念佛宗の教義」 吉井良顕

「融通念佛宗の血脈」 杉崎大慧

資料編には、清原実明氏伝持の大念佛持本である『略布薩次第』A本とB本と、曼殊院所蔵の『出家作法』、勝林院所蔵の『引声阿弥陀経』が写真版で載せられている。そして『略布薩次第』A・B本と『出家作法』にはそれぞれ小寺教授、白土教授により、翻刻と書下しとが付せられている。

## 二

これまでの良忍研究は、その念佛思想と伝記の面からの考察

がほとんどであった。融通念佛宗内では、始祖としての良忍研究がなされ、そこからは『融通念佛縁起之研究』（田代尚光）という、学会での評価の高い書も出ている。良忍とは直接関係しないが、民俗的念佛として融通念佛を取りあげたものとして「融通念佛・大念佛および六斎念佛」（五来重・大谷大学研究年報「十号」）がある。又史実としての良忍像を究明しようとしたものとしては、「聖応大師伝史料の二二に就いて」（岩橋小弥太・『史料探訪』所収）、「融通念佛宗開創質疑」（塚本善隆・日本佛教学会研究年報「二十一号」）、「日本浄土教成立史の研究」第三章第一節の四「大原念佛、特に良忍について」（井上光貞）、「院政期における別所浄土教の考察―良忍上人伝をめぐって―」（西口順子・『史窓』十五号）などがある。塚本博士の論文では、初期の良忍伝では融通念佛のことが明瞭に説かれていないこと、法然（一一三三―一二二二）期には天台色の濃い浄土教が有利であったことなどから、良忍には融通念佛思想はなく、後にその聖業に寄せて上人を開祖と仰ぐようになったのではないかとの疑問を提示されている。この問題について佐藤博士と横田氏は、『叡山浄土教の研究』の中でこの説に反対する見解を示しておられるが、本書でも、思想面と歴史面の両方から、融通念佛の起源は良忍にあると主張される。

本書の特色は、今までほとんど取りあげられなかった良忍の戒律観、声明業についての新しい研究がなされている点である。叡山戒脈中、山門・寺門の両系統の相承を受けた良忍からは、叡空―源空―信空へと繋がる黒谷流、薬忍―湛賢―湛智と続く

大原流、敵賢―明応―観西へと次第する大念佛寺への相伝、という具合に三流が派生する。この良忍の戒律観を『略布薩次第』により考察した小寺教授の論文、曼殊院本『出家作法』を良忍の著作であると想定した白土教授の論文は、これからの良忍戒律研究のよき手引となると思われる。

天台宗内で良忍が大きな位置を占めるのは声明業の中興者としてである。しかし諸文献に良忍の声明業大成への言及が散見できるにもかかわらず、その具体的な形態を知ることができなかった。この意味からも『引声阿弥陀經』の発見は大きく、天納教授の論文は、良忍声明研究の端緒となるものである。

良忍の思想には、天台教観・念佛・戒律・声明・密教といったものが複雑に絡まっており、その各方面からの探究なくしてはその実像に迫りえないのであり、本書で新出の資料により、良忍の戒律観、声明業を知る糸口が示されたことは、大きな意味をもつといえよう。

### 三

次に各論文の内容を示すと――

「良忍上人と融通神道」（田代尚光） 神名帳の成立を融通神道の起源として、両部、一実両神道より歴史的に古いというこの神道が、融通念佛といかに関わるかを示したのが本論である。融通神道は、融通念佛を媒介とした神祇への崇拜であり、諸神が護持し礼讃する融通念佛の実践がそのまま融通神道の行となる。この融通神道と融通念佛が結合する理念として、天照

大神の神徳と阿弥陀佛の佛徳との一致が説かれる。即ち阿弥陀佛を無量光と無量寿の二義に分析し、前者が華嚴の空間的無限を、後者が法華の時間的無限をそれぞれ表わすとして、これに天照大神の六合照徹と天壤無窮の二義を対応させる。この理念にもとづく融通神道の行法は、名帳の加入、神佛の併祀、神佛名の併称の三点であり、融通念佛宗では神佛習合の伝統に従い、現在も絶やすことなくその行法を伝承しつづけている。又、融通神道で八幡神を祀る理由を述べた後、神明再授の伝における融通念佛宗と八幡神との関係が説明されている。

「叡山浄土教における良忍上人の地位」(佐藤哲英) 良忍

の融通念佛思想が天台法門を浄土教において展開したものであることは、早くから述べられてきた。源信(九四二—一〇一七)には著書が多く、その浄土教思想についての研究も豊富であるのに対して、良忍の浄土教思想はあまり跡付けられていない。良忍研究はその著作の少ないことが大きな障害となつているが、ここでは良忍にごく近い時期に成立したと考えられる書を『恵心僧都全集』より抜き出し、その真筆者をあげ、良忍当時の叡山浄土教の思想背景が考察されている。その資料として提示されているものは、『妙行心要集』、『自行念佛問答』、『決定往生縁起』、『菩提要集』、『真如観』であり、このうち融通念佛と極めて近い十界念佛を説く『決定往生縁起』に対して特に注意が払われている。鎌倉中期以降に成立した『古今著聞集』、『融通念佛縁起』から一即一切の融通念佛義を導き出し、これと先の資料とを対照した後、良忍に融通念佛思想があつても時

代思潮と矛盾せず、良忍こそは融通念佛の創唱者であると結論されている。

「大原如来蔵における良忍上人関係資料」(横田兼章) 大原  
来迎院の経蔵である如来蔵の蔵書から良忍上人の筆写本や手摺本を取りあげ、それにより上人の思想基盤を探ろうとするのが本論文である。横田氏が如来蔵資料から導き出された事実で主だったことは、良忍の青年時代天台研究が相当進んでいたこと、『三観義私記抄』は良忍研究の新資料として注目すべき文献であること、康和五年良忍三十一歳のときなお叡山にいたことなどである。

「良忍上人伝の研究」(佐藤哲英・横田兼章) 良忍上人に  
関する文献を、その史料価値に応じて分類し、そこからより史実に近い良忍像を描き出し、そこに融通念佛思想があつたかどうかを探り、後世の伝記にみられるような粉飾がどのような過程を経てなされていくかを示したのが本論である。良忍伝の根本史料としては『布薩略作法』、『出家作法』、『三観義私記抄』、大原如来蔵の上人関係資料などがあげられ、第一次史料は『後拾遺往生伝』と『三外往生記』の良忍伝、第二次史料は『古今著聞集』、第三次史料は『融通念佛縁起』、『元享釈書』の良忍伝、第四次史料は『本朝高僧伝』の良忍伝、『融通門円章』という具合に区分される。ここから根本史料と第一次史料に基づき、これ以降の伝承との対比を通して、史的人物としての良忍像を浮き彫りにしようとする。『三外往生記』の夢告の文を史実として、良忍に融通念佛思想があつたとの説をなしたのは、

井上博士の前掲書においてである。本論でも、良忍上人寂後十数年にして書かれた『三外往生記』に、夢告としてでありながらも良忍の言葉として融通念佛のことが出て以上、融通念佛の起源は良忍にあると結論されている。

「良忍上人作『略布薩次第』の研究」(小寺文顕) 『略布薩次第』A・Bの二本は、大原魚山の覚秀が百年前の良忍上人御遠忌のとき現修所用のため大念佛寺に付属したものである。この大念佛寺本の布薩作法を、叡山所伝の二本の『布薩略作法』と対比しながら、その成立の問題が述べられる。まず叡山における布薩の歴史をたどり、最澄(七六七—八三三)の明曠戒疏による伝承と、円仁(七九四—八六四)による唐風の新しい伝承の二系統があることを示し、叡山における大乘布薩は円仁入唐前後を通じて行なわれていたとする。次に南部の布薩の伝承を示し、その復興の師である中川実範(一〇八九—一一四四)と良忍とに何らかの交渉があったとし、良忍『出家作法』の沙弥戒が叡山所伝の十善戒でなく十重戒とされたのは、実範の『出家授戒法』の影響によるのではないかと考察される。又、良忍による布薩の簡略化については、布薩を大衆化するためであり、その音楽化もこの方向を示すものとする。大念佛寺所伝本の『略布薩次第』については、A本が慈円(一一五五—一二二五)筆の『布薩次第』の後半部分と一致し最澄の伝承を受けるものであること、B本が『布薩次第』の前半部分と一致し円仁の系統を引くものであることがそれぞれ説かれている。

「良忍上人と曼殊院本『出家作法』」(白土わか) 曼殊院よ

り発見された『出家作法』を良忍の著作ではないかと想定し、ほぼその想定に誤りないとの結論からこのテキストを考察したのが本論である。『出家作法』の添書「永久年中依二条阿闍梨詔所令抄出給也」を取り上げ、青蓮院関係の文献によりこの「二条阿闍梨」を三昧阿闍梨良祐であると、良祐ほどの学僧が依頼していることから、『出家作法』の作者は戒律面で重要視されている人物であろうと推測される。次に本文中の「初相伝ノ戒者奉始自盧舍那如来至于某次第相伝タルコト十九代也」から、この作者が盧舍那如来より十九代目に該当するとして、盧舍那靈山の両相承の十種近い戒脈から十九代目に当る人物を導き出し、その中から永久年中に活躍した人物として良忍が挙げられている。更に良忍作であることを追求して、(一)良忍に『略布薩作法』という著書がある以上、『出家作法』があっても支障はない、(二)『門葉記』には大原来迎院で自恣作法が行なわれていたことが示されている、(三)曼殊院蔵『蘇悉地相承』から良忍—仁弁への相承が伺え、曼殊院に仁弁関係の書写本が多いことから、『出家作法』が曼殊院に所蔵されていたのは仁弁を通じてと思われる、(四)良忍と良祐には親密な関係がある、という四点が示される。終りに、この作法により出家した人物と『出家作法』から見た良忍の戒律観が考察されている。

「良忍上人と魚山声明」(天納伝中) 円仁より始まる天台声明において良忍は、その中興の祖として高く評価されているが、このことを証明するものとして、『魚山声曲相承血脉譜』、『声明源流記』、『弾偽褒真鈔』などを引用した後、戒品声明と

常行堂声明について説明される。戒品声明は梵網戒品に音曲が付けられたものであり、その使用は布薩会においてであろうと想定されている。次に常行堂の声明として、引声作法常行三昧についての説明がなされる。引声作法の起源は円仁の五台山念佛の相承に初まるが、それが常行三昧堂で修せられた時期は、円仁からとする説と、相応(八三—九一)からとする説があり、論者はそのいずれであるか決め兼ねている。良忍がこの引声作法の相伝にも重要な位置にあることを述べた後、大原における良忍の事績について説かれる。最後に、勝林院本『引声阿弥陀經』の考察がなされている。

「円覚十万人上人道御伝」(藤井元了) 清涼寺で大念佛を始め、良忍の融通念佛を興隆したとされる円覚上人道御(一二三—一三二)の伝記と布教活動について述べた論文である。

「佛教思想と融通念佛」(泰本融) 融通念佛思想を宗学者詮海(二七六—一八六)の所説を中心にして論じたものである。「融通念佛宗の教義」(吉井良頭) 『融通円門章』などによる融通念佛宗の教義説明である。

「融通念佛宗の血脈」(杉崎大慧) 融通念佛宗の血脈は不明瞭な点が多いが、この血脈を『大念佛寺誌』などにより考察したのが本論である。

#### 四

以上、ごく大ざっぱな内容紹介を示したが、ここで私なりに疑問を感じた点についてふれてみたい。

「良忍上人と融通神道」の中で田代師は、融通念佛宗では華嚴経と法華経を正依の經典とすることや、融通念佛と神道とのつながりについて述べられている。この融通念佛と華嚴経及び神道との関係は、これまでの融通念佛宗内での教学でしばしば説かれてきたことであるが、本論文では又、融通神道の理念として阿弥陀佛と天照大神の徳の一致や、華嚴経と無量光、法華経と無量寿とが結びつくことが説かれている。これらの所説は、どのような文献を根拠として導き出されたのか示して頂ければ幸いである。

次に佐藤博士と横田氏は、一行一切行という念佛思想が平安末期の天台浄土教に見られること、良忍寂後十数年にして成立した『三外往生記』に良忍と融通念佛が関連して説かれていることなどから、良忍こそ融通念佛宗の開創者であると結論されている。しかし先に掲げた西口氏の論文には、融通念佛の形成期には意識的な天台教義への接近が考えられることから、良忍の念佛と融通念佛とを直接結びつけることに對する疑問が述べられている。これに付随する問題として、専修念佛の彈圧により融通念佛が隆盛したという塚本博士のご主張があるが、両先生はこれら良忍と融通念佛との関係を疑問視する説に對してどのようなご見解をお持ちなのか、後学者のためにお示し頂ければ喜ばしく思う。

(昭和五六年五月) 百華苑 B5版 序四頁 研究編一七五頁 資料編九一頁 六、〇〇〇円)